

ワークショップ： 超々高齢社会における認知研究の新しい切り口を考える： 29年後の日本認知科学会に向けて Workshop: JCSS in the Hyper-Aged Society

小橋康章（ファシリテーター）
Yasuaki Kobashi

株式会社大化社・成城大学
Taikasha, Co.Ltd., Seijo University
kobashi@taikasha.com

Abstract

This workshop explores possible roles, contents and methods of Japanese Cognitive Science Society in the hyper-aged society.

Keywords — JCSS, Cognitive Science, Future, Hyper-Aged Society

1. 目的と対象

超々高齢社会を背景とするこれからの日本認知科学会の可能性をテーマに、比較的高齢の会員と高齢者研究を実践している学生会員の対話を中心に、いままで直接話をする機会がなかった会員同士が対話することで学会の未来に対する想いを共有したいと思います。

昨年、第30回という節目の大会を機会に、一般会員の立場で学会の未来がどのようなものであれば嬉しいか、を考えるワークショップを開催しましたが、今回も専門分野にかかわらず、超々高齢社会に向かう認知科学コミュニティの未来をともに構想したい会員並びに非会員、とくに高齢の研究者と学生を含む若年の研究者の参加を強く呼びかけます。

2. 背景

(1) future centers とか future sessions といった施設や催しに関心が集まっています。組織や立場を超えて未来をともに考え、その過程で社会関係資本を蓄積しようというのが背後にある考え方です。JCSS のような出来の良い学会は多かれ少なかれフューチャーセンター的な性格をもっていますが、それは主にコンテンツに関してであって、

学会、あるいは研究コミュニティのありかたそのものに関して語ることは、常任運営委員会のような場を除けば比較的希です。未来は予測するものでもあり創造するものでもあります。1983年の日本認知科学会の誕生は戸田正直の1969年ロンドンでの講演「非常に遠い未来における心理学の可能なくつかの役割」で予言されていたとも言えますが、そこで論じられていた際限のない技術開発の加速や社会組織の相対的老朽化、グローバリズムのもたらすリスク、若者の失望、といった問題は日本認知科学会というユニークな学会の創造を経ても未だに解決を見ていません。我が国だけをとりあげてみれば、これらに加えて人口の減少と著しい高齢化がほぼ確実なものとして予測されています。学会の未来を考えることを通じてこうした未解決の問題にわたしたちが今後どう取り組んでいくのかについても話題にしたいと思います。

(2) JCSS の立ち上げに参画した当時の若い研究者たちも定年の時期に差し掛かり、研究の進め方についてもこれまで通りにはいかないことを認識しつつあるものと思われます。いっぽう心のメカニズムを追求してきたかなりの数の研究者たちが、高齢者認知や高齢者と若年層の相互作用にかかわる諸問題をわがこととして(＝一人称的に)研究する機会がようやくにして訪れたとみることもできます。

(3) 現実に「高齢者と若年者が集い、協同して問題解決を行うコミュニティの意義と問題点の検討」に着手した若い研究者たちもいます。彼らの

経験も参考にしつつ、認知科学的な観点を積極的に取り入れることで、高齢者そのものに対象を絞って身体的心理的問題を検討してきたこれまでの高齢者研究とは異なる新しい切り口を発見できるのではないかと期待しています。

3. プログラム

(1) 話題提供者・指定討論者が会場の中央に円陣を組んで座り、一般参加者はそのまわりを取り囲むように席を占めます。

(2) 企画責任者によるイントロダクションのあと、話題提供者がそれぞれ超々高齢社会に向けての認知科学研究のコンテンツ、方法、あるいはコミュニティに関する見通しを語り、指定討論者が議論のきっかけを作る中で、一般参加者もお望みなら適宜この対話に参加していただきます。

(3) 多くの学会時ワークショップが採用している発表－議論の形態よりはるかに日常の会話に近い場を実現したいため、予稿は用意しません。またパワーポイントなどの発表支援ツールも使用しません。

(4) とはいえ、ある程度会話の種を仕込むため以下のような話題を用意してみました(順不同)：

○素人は専門家の議論に貢献できるか(学生や高齢者は科学のプロセスにどう参加していくのが望ましいか)。科学哲学者はこのへんのことをどう考えているのだろう。

○高齢者を研究者に育てるために大学と学会はどのように役割分担をしたらよいか。

○高齢者が高齢化問題の一人称的研究をしようとするとき、どんな支援を期待できるか。

○認知科学に「差し迫った問題」はあるのか。

○高齢のアーティストはこどものアートの鑑賞者・キュレーターになれるか。加齢による知覚や認知の変化が新たな資源になりうるのか。

○世代間コミュニケーションにおける年齢的連続関係と断続関係。教育に有利なあるいは不利な年齢差というものはあるのか。

○似た者同士の協力か異質の統合か。

○これからの JCSS にどんな役割や機能を期待するか。

4. 話題提供者・指定討論者(五十音順)

話題提供者： 齋藤洋典(名古屋大学)、田中伸之輔・広瀬拓海(筑波大学)、戸田山和久(名古屋大学)

指定討論者： 行場次朗(東北大学)、新垣紀子(成城大学)、諏訪正樹(慶應義塾大学)

一般参加者： 超々高齢社会に向かう認知科学コミュニティの未来に関心をもつ会員並びに非会員

5. 参加者へのお願い

このワークショップは学会の大会の中に埋め込まれた小大会でも、「知っている人」が「知らない人」に向けた発表会でもありません。学会は多くの同志によって成り立っているひとつのコミュニティです。正統的周辺参加というような概念を思い出していただいても結構ですが、発表する人もいれば質問をすることが得意な人もいます。運営を担当して黒子のように陰で支えている人たちもいます。またサッカーのサポーターのようにボールには触らないけれど、一緒にゲームを作り出している人たちもいます。どの人も欠くことのできないチームメイトです。みなさんもぜひ学会の未来とご自分の未来を重ね合わせていただき(私はいくつになっているのだろう)、JCSS がどのような径をたどっていればそれぞれが幸せかをぜひ一緒に考えてください。